

『生涯書生』 ～ 【教育というものは本来『私事』である】 ～

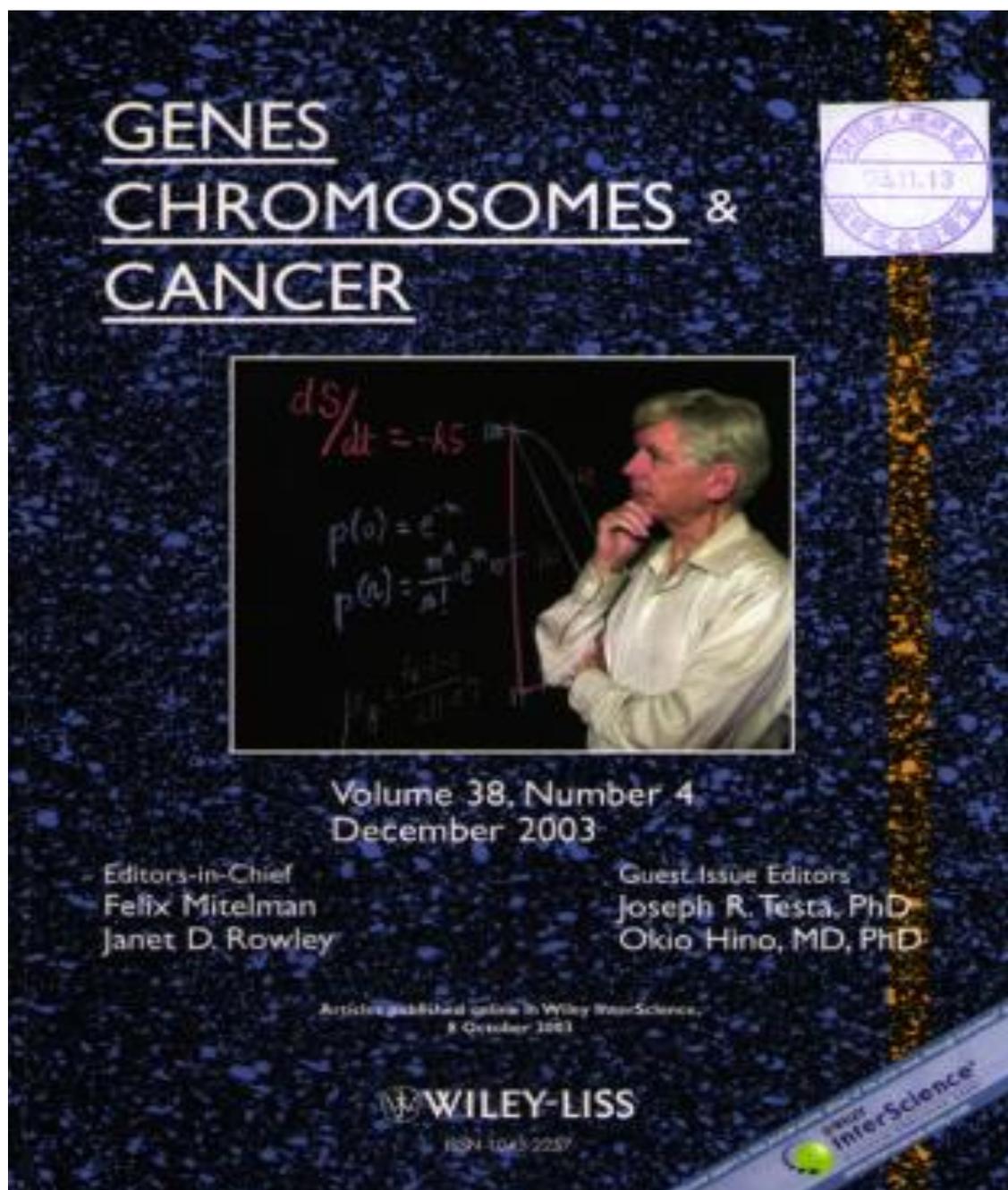
2025 年 3 月 8 日 『杏林大学三鷹キャンパス 大学院講堂:学部付属病院第 2 病棟 4 階』での【第 105 回日本病理学会関東支部学術集会 世話人 杏林大学医学部病理学教室 藤原正親先生】に出席した。特別講演 1「TNM 分類の改訂と肺癌取扱い規約第 9 版」& 特別講演 2「胸腺上皮性腫瘍の病理診断」& 4 つの一般演題

であった。『純度の高い専門ある発表』は、『日進月歩の病理学』の大いなる勉強となった。『生涯書生』である。

想えば、筆者は医師になり、癌研究会癌研究所の病理部に入った(1979 年)。そこで、当時、癌研究所所長であった菅野晴夫先生(1925-2016)との、大いなる出会いに遭遇した。菅野晴夫先生にフィラデルフィアの Fox Chase Cancer Center の Knudson 博士(1922-2016)の下で『Science を学んでくるように』と留学(1989 年)の機会が与えられた。1991 年には、癌研実験病理部部長として、帰国するようにと指示を頂いた。『30 代は、人に言われたことを、がむしゃらに行い、40 代で、自分の好きな事に専念し、50 代で、人の面倒を見るように、60 代になっても、自分のことしか考えていないなら、恥と思え』と教わった。

筆者が会長を務めた【第 99 回日本病理学会総会(2010 年)】において、菅野晴夫先生に特別企画『病理の百年を振り返って』をして頂いた。【教育というものは本来『私事』であるべきである】(吉田富三:1903-1973)の精神が甦る。【『がん哲学』の理念は、『がん細胞で起こることは、人間社会にも起こる』の学習である。『がん哲学』は、人間そのものについて考える人間学である。『がん哲学外来』では、『病気に対する正しい理解』を深めることを目的とするものであり、具体的に様々な病変の『正常細胞と異常細胞の違い』を学ぶことで、『病気』の具象的なイメージを捉えることである。】

その後、帰宅して 2004 年にスタートした『南原繁研究会』の 3 代目の代表を 2019 年南原繁(1889-1974)生誕 130 周年を祝し、仰せつかって『第 244 回 南原繁研究会』に Zoom 方式で出席した(画像)。大いなる学びの 1 日となった。



《樋野先生の夢》

7人の侍：「勝海舟・新島襄・内村鑑三・新渡戸稲造・南原繁・矢内原忠雄・吉田富三」と先生の恩師：「菅野晴夫先生（癌研時代）、Alfred George Knudson 博士（アメリカ時代）」と樋野興夫先生とで天国でメディカル・カフェを開催すること。希望者はお茶係に採用して下さるはずです。

